# ハーモニカ

## 記憶にのこる黄銅リードの音色

誰もが一度は手にしたことのあるハーモニカ。情緒豊かなその音色は、いつの時代も日本人の心をつかむ魅力をもっている。このハーモニカの音色が銅から生まれているのを知る人は少ないだろう。

ハーモニカの原型は日本がまだ江戸時代の一八二二年、ドイツで生まれた。その後、改良を繰り返しながらアメリカに渡り、日本に渡来。一九一〇(明治四十三)年に国産ハーモニカ第一号が生産され、今日にいたるまで、さまざまな歴史と文化をつくっている。

多くの種類があるハーモニカのなかでも、もっとも日本人に愛着があるのは唱歌や童謡などで親しまれてきた「複音ハーモニカ」の音だろう。複音ハーモニカは日本で発達した楽器であり、その分野において、日本は現在も世界の最先進国である。

複音ハーモニカには一つの音に二枚のリードがついている。上下段に並んだ同じ音の二枚のリードは、わずかにピッチをずらして調律されており、二枚のリードが共鳴しあい、複音ハーモニカ独特の美しいトレモロ(波動)のついた音を生みだす。この心地よい音の源となっているのが、黄銅板やリン青銅板製のリードだ。

ハーモニカにとってリードは心臓部である。創業以来五十年、リード技術を研究し続けてきた鈴木楽器製作所ではリードは「生き物」と考え、今も熟練の職人の生きた手を通してつくられている。

各ハーモニカに最適に設計されたリードは、職人たちの手によってミクロン単位の精度で削りだされる。音階によっても異なるがリードの厚さはおよそ〇・一ミリ弱――。熟練の職人たちは、計器以上の精度を手の感覚で計ることができるのだ。黄銅板やリン青銅板製のリード材帯は、打ち抜き性がよく、加工後の仕上がりがよいという。また耐疲労性がよく、バネ性に優れているので、複音ハーモニカの微妙なトレモロをより長く、美しく保てるということだ。

ハーモニカのリードには、昔から黄銅が多く使われてきた。金や銀では軟らかすぎて発音が悪く、鉄では硬すぎて吹くのにとても苦労する。人間の息の繊細でダイナミックな演奏を表現するには、やはり黄銅製のリードが一番なのだ。

黄銅製リードの繊細できらびやかな音色は、どこか懐かしく、自然と心に染みわたってくる。手のひらに収まるこの小さな楽器には、熟練の職人たちの高い技術と、たくさんの人の思い出が詰まっているのだ。

帯状の黄銅板をミクロン単位の精度で削り出す

プレートの加工形状もハーモニカの基本性能に大きく影響する

最良の音で鳴るように職人の手でひとつひとつ調整される

職人技が光る複音ハーモニカ

取材協力　株式会社鈴木楽器製作所